

1 事業名 ボランティア活動入門セミナー

2 必要性

「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」（中央教育審議会答申・平成14年7月29日）を踏まえ、青少年がボランティア精神を育み、生涯を通じて様々な場面でボランティアとして活躍できる人材を育成する必要性は従来から指摘されている。多くの青少年が、ボランティア活動を通して、社会にとって有用な人材として活躍するための支援をすることは、青少年教育施設の使命である。

また、ボランティア活動に参加する青少年の活躍の機会を広げ、あらゆる活動の中でリーダーシップを発揮しながら活躍できる青少年を育成する事業は、社会からの要請があるところである。本事業は国立青少年教育施設が有する機能を最大限に活かし、青少年にボランティア活動に関する学習の機会を提供するものであり、主体的に社会に参画しようとする態度を養成するものである。

3 趣旨

ボランティア活動を始めようとする青少年に、ボランティアについての学びの場を提供することで、ボランティア精神を育むとともに、社会の様々な場面で主体的に活動することのできる人格の形成に資する。

4 後援

島根大学、島根県立大学

5 期日

平成23年5月13日（金）～5月15日（日）

6 参加者

- (1) 募集対象・人数 ボランティア活動に興味関心のある大学生・青少年 30名
- (2) 参加人数 50名（左記以外にボランティアスタッフ8名の参加）
- (3) 参加者分析 大学生・青少年30名の募集に対して、定員を大幅に超える50名の参加があった。その内訳は、下表のとおりである。参加者の本事業への参加のきっかけは、各大学で実施した説明会での説明を聞いて興味を持ったことが大半であり、「交友を広げるため」に参加した参加者も多かった。

所属	人数	合計
島根大学教育学部	38名	50名
島根県立大学短期大学部（出雲キャンパス）	8名	
島根県立大学短期大学部（松江キャンパス）	3名	
県内公立高等学校講師	1名	

- (4) 参加地域 島根県 50名

7 講師等

松岡 広路 氏（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）
飯塚 幸夫 氏（出雲市消防本部警防課）他3名

8 参加経費 3,400 円

9 事業の内容

(1) 事業の特色

本事業は、ボランティア養成の入門編に位置づけ、人間関係能力・コミュニケーション能力などのソフトスキルや野外炊飯の安全管理や指導法等のハードスキルなど、ボランティア活動を実施する際に求められる基礎基本となる事項を学ぶ機会を提供するものである。また、国立青少年教育振興機構の法人ボランティア養成共通カリキュラムとして実施し、今後当施設でボランティア活動を希望する者に対して、法人ボランティア登録の機会を提供するものである。さらに、現在登録している法人ボランティアに事業運営の補助を担ってもらうことで活躍の場を提供し、ボランティア活動に携わる技術や意識の向上を図る。プログラム構成については、10月に実施する教育事業「さんべ祭」の企画・運営やその他の教育事業の運営補助などの活動に繋がるよう工夫した。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

今回のプログラム構成のねらいとして、①ボランティア活動の基礎基本の学習、②今後の活動の基本となるボランティアネットワーク形成、③具体的なプログラムの知識・技術の獲得の3つを位置づけた。参加者が50名と多い中、より効果的に学びを深めることができるようにグループ単位での活動を多く設定した。また、先輩ボランティアの指導する機会を多く設定することで、参加者に当施設でのボランティア活動をイメージできるようにした。さらに、参加者に対する指導は、先輩ボランティアにとっても、個人のスキルアップにつながる機会であると考え、参加者、ボランティアの双方に学びがあるプログラムとした。

平成23年4月に実施した「ボランティア集会」の際に、先輩ボランティアから「三瓶でのボランティア活動を参加者のみんなにどうにかして伝えたい！」という自発的な声があがり、プログラムの一部を先輩ボランティアに委ね、企画・運営してもらった。

平成22年度にも同様の事業を実施しており、その際に実施したアンケートに「活動と活動の時間が詰まりすぎている」や「休憩時間がほしかった」などの記述があったことを加味し、休憩時間等をできるだけ確保し、ゆとりのあるプログラムを構成するように心がけた。

1日目・2日目は、体験を通して学び、最終日に「青少年教育の理解」「ボランティア活動の意義」のコマを講師に依頼することで、2日間の活動をふりかえりながらボランティア活動の概要を学べるように意識した。

(3) 広報のポイント

島根県内の大学が実施するボランティア活動等に関する説明会に出向き事業への参加を促したり、島根県内および広島県内の大学・専門学校に要項を配付し、設置してもらった。説明会では当交流の家職員の他に先輩ボランティアにも参加してもらうことで、説明会に参加した学生は直接具体的な話を聞くことができたと考えられる。また、ボランティアが今後の活動に計画的に参加できるように、当施設が募集する年間のボランティア活動を記載したチラシを作成し、配付したことが参加者が平成22年度に比べて大幅に増加した要因であったと考えられる。

(4) 日程表

5 / 1 3 (金)	20:00		20:30	21:00		22:00		23:00	
		受付	オープニング	青少年教育施設の現状と課題 「交流の家ってどんなところ？」 「心と心をつなぐアイスブレイク」		入浴	就寝		
5 / 1 4 (土)	6:30	9:00		12:00	14:00	17:00	19:30	21:00	23:00
	起床 つどい 朝食	救命救急法 「野外で大切な 人を守るために」		昼食	プログラム体験① 「竹を使った バウムクーヘン作り」	つどい 入浴 夕食	プログラム体験② 「火をともし キャンドル体験」	交流	就寝
5 / 1 5 (日)	6:30		9:00		12:00		13:00		15:00
	起床 つどい 朝食	青少年教育の理解 ボランティア活動の意義 講師：松岡 広路 氏		昼食	青少年教育施設におけるボランティア活動の理解 「さんボラ体験記」「ふりかえり」 クロージング		解散		

(5) 内容及び講師

① 講義・演習「青少年教育の理解」

神戸大学 松岡 広路 氏

・学校教育法や各種調査研究の報告を基に、青少年の生活習慣の乱れや体験活動の必要性について説明した。

② 講義・演習「ボランティア活動の意義」

神戸大学 松岡 広路 氏

・ブレインストーミング法や東日本大震災で講師が実際にボランティアとして支援した様子の映像などを用いて、グループごとに「ボランティア活動とは？」について考え、全体でその考えを共有した。



松岡先生の講義「ボランティア活動とは？」



参加者全員で記念撮影

③ 講義・実習「青少年教育施設の現状と運営」

国立三瓶青少年交流の家 藤江 龍

・当施設で実施しているスライドを用いたオリエンテーションの実施や朝夕のつどいへ参加することで、青少年教育施設の役割・運営について説明を行った。



夕べのつどいで司会を担当！



「交流の家ってどんなところ？」



レクリエーション「みんな乗っかれ！」

④演習「青少年教育施設におけるボランティア活動の理解」 国立三瓶青少年交流の家 藤江 龍

- ・当施設の実施する教育事業についてスライドを用いたり、先輩ボランティアの体験談を話したりすることで説明を行った。
- ・国立青少年教育振興機構の法人ボランティア制度について、登録の流れや手続き、待遇等の説明を行った。

⑤活動スキル実習「救命救急法」

出雲市消防本部 飯塚 幸夫 氏

- ・人体模型を用いて、AEDの使用も含む心肺蘇生法を4つのグループに分かれて実施した。



講義「大切な人を守るために」



救命救急法「心配蘇生法の実践」



救命救急法「AEDを用いた応急手当」

⑥活動スキル実習「野外炊飯」

国立三瓶青少年交流の家 楫 絵里子

- ・安全管理や環境問題を意識しながら、当施設で提供している活動プログラム「バウムクーヘン作り」を8つのグループに分かれて実施した。



先輩ボランティアの指導



プログラム体験「バウムクーヘン作り」



バウムクーヘン完成！

⑦活動スキル実習「キャンドルのつどい」

国立三瓶青少年交流の家 藤江 龍

- ・先輩ボランティアが企画した活動やレクリエーションゲームを実施した。



先輩ボラ企画「夏祭りを考えよう！」



先輩ボラ企画「企画を発表しよう！」



プログラム体験「キャンドルのつどい」

(6) 運営のポイント

参加者が多く、一人一人のねらい（目標）を全体で共有したり、ふりかえりをしたりする時間が十分に確保できないことが予想されたため、ねらいなどを一人一人が画用紙に記入し、掲示することで他の参加者や先輩ボランティアの思いを共有できるようにした。

事業全体を通して参加者同士や参加者と先輩ボランティアの関わりを重視し、生活面については先輩ボランティアが指示、指導するようにした。グループ編成の際は、できる限り他の大学や初対面の者同士が同一グループになるように編成し、グループ毎に先輩ボランティアを配置するなど、コミュニケーションが図れるように配慮した。職員は参加者の安全管理、健康管理に努めた。

(7) 安全管理のポイント

所外での活動については、事前に活動場所の踏査を行い安全確認を行った。また、野外炊飯の活動では刃物や火気の使用には十分に注意を払いながら指導した。さらに参加者に対して朝夕のつどいで健康状態の確認を行った。

(8) アンケートの満足度・主な記述

満足度（参加者 50 名中） 満足 48 名（96.0%） やや満足 2 名（4.0%）

- ・大自然の中で野外炊飯など普段体験できない楽しい活動ができてよかったです。
- ・ボランティアに対する考え方を深めるきっかけになりました。
- ・ボランティアのことだけではなく、自分自身の生き方、人生につながる発見がたくさんあり、新鮮な気持ちになりました。
- ・松岡先生の講義は本当に最高でした。出会いに感謝です。
- ・松岡先生の講義がとても印象的でした。久しぶりにもっと聞きたくて仕方ないという気持ちになりました。
- ・多くの人と学校・学年・性別を超えて仲良くなれました。コミュニケーション能力を高めることができました。
- ・今まで経験したことがないことや今までやりたくなくて避けてきたことなどを自然と経験させてくれた本当にいい体験でした。
- ・経験がある先輩ボランティアはやっぱり違うなあと思ったし、とても親しみやすくわかりやすい指導でした。

10 成果と今後の課題

<成果>

- 予定数を 20 名上回る 50 名の参加者全員が法人ボランティア登録をした。
- 今回の参加者には島根県立大学の学生も 11 名程度あり、これまで島根大学教育学部の学生中心であった当施設のボランティア活動も、今後はこの 2 つの大学の学生が中心となり、連携しながら活動に参画してもらえることが期待できる。
- 参加者に実施したアンケートによると、「ボランティアに対する考え方を深めるきっかけになりました。」や「ボランティアのことだけではなく、自分自身の生き方、人生につながる発見がたくさんあり、新鮮な気持ちになりました。」など前向きな意見が多数あり、今回の事業はボランティアやボランティア活動についてのイメージを持たせ、これについて改めて考えるきっかけを提供できた。

<課題>

- 受講希望者の意欲を優先した結果、講義や演習のコマでは講師1人に対して受講生50人という状況があり、人数的な面で多いという講師からの指摘があった。受講生を2グループに分けて講義と他の活動を同一時間に設定し、その後入れ替えを行ったり、事業を二度に分けて実施したりするなどの改善が必要である。
- 平成22年度からの更新に加え、今回新規で登録した者も含めると法人ボランティア登録者数が大幅に増加した。このため、今後法人ボランティアが当施設で実施するボランティア活動に継続的且つ積極的に参加できるよう、活動機会の新規設定やボランティア募集方法の改善をする必要がある。
- 複数の大学（キャンパス）の学生が法人ボランティア登録をしている状況に対して、当施設職員が仲介役となり、ボランティア同士のネットワークを整備する必要がある。

11 普及計画・普及実績

島根県内の新聞社・テレビ局等の報道機関に広報した結果、地方新聞1社が事業の一部を取材後に記事として掲載し、事業の広報につながった。またホームページ上に要項や事業の様子などを掲載することで事業内容を社会に広く周知することができた。

また、年間のボランティア活動を記載したチラシを、平成23年度教育事業青少年教育指導者等の養成・研修事業「青少年教育指導者ミーティング」において配付・説明することで、公立施設へのボランティア募集に関する手法の普及にもなったと考える。

12 その他

当施設の提供する魅力ある活動プログラムの体験や講師及び先輩ボランティアからの指導・助言により、本事業はボランティア活動の基礎を学ぶ有意義な機会となった。平成23年度は、平成23年3月に発生した東日本大震災の影響もあってか、参加者も熱心に講義を受講し、休憩時間などにも積極的に講師に対して質問をするなどの姿もみられた。このような参加者の姿から青少年のボランティア活動に対する関心が高まってきていると感じた。

(担当 藤江 龍)